

七月二十二日

歴史家達の年を経てもあり続ける生気の素は何なのかな、とつくづくと思う。小さな自分を捨象して対象に帰心してゆく、その純粹さが年を取ってから、自分の身についてくる、そして自然に蓄積される自然の恵みなんじゃないか。彼等の存在が日本の今の惨状の救いかも知れぬと、いささか大げさに考えてしまう。日本は音を立てての崩壊の最中だ。ガラガラと崩れつつある音が聴こえるな。早朝、目覚めてしまい、独人そんな暗鬱さの中に沈降している。

九時四五分府中。八大建設西山社長と国分寺〇邸現場へ。十一時過了。府中で共に昼食、色々と寺院建築展開への作戦を立てる。十三時半研究室へ。十四時前、工作社、山本伊吾社主、長井、他来室。秋よりの連載その他の打合わせ。工作社の新人は何と歴史的な二人目の男性で、強くない体育会系、例えばバトミントン部とかの出身かと思いきや、何と何処かの文学部の演劇サークルの出身らしい。ビックリ眼玉のマッチョな男で、と長年の工作社との附合いに免じて陰口をば言わせていただく。私の担当になるのだったら、チョビリとしごいてやろうと決めた。十六時YKK来室。北京のカーテンウォールの件で打ち合わせ。日本の企業にしては流石前向きだな。十七時半より研究室内の幾つかの打合わせ。ひろしまハウス、農村研究会、〇邸、S邸他。二〇時四〇分迄。近江屋で一息入れて、二十三時前世田谷村に戻る。